

2024 年度「森の恵み」を考える——人と自然の平和的共存に向けて」報告

青柳寛・戸谷浩・野口久美子・勝俣誠
猪瀬浩平（コーディネーター）

世界各地で、深刻な森林破壊が進んでいる。このような状況のなかで、本研究は、歴史学や文化人類学、政治経済学の立場から、人と森、林との関係を歴史的、文化的に検討し、人と森林、人と植物の持続的で、調和的關係を生み出すための「森林の思想」を探ることを目的とする。気候変動や産業化によって森林をめぐる状況が劇的に変化するなかで、人びとの遊びを含めた暮らしや、自治がいかに成立しているのかを視野に入れる。

2024 年度は以下の活動を行った。

2024 年 6 月 8 日 東京の緑をめぐるフィールドワークと、藤井英二郎氏によるレクチャー

白金校舎にて、千葉大学名誉教授で、環境植栽学を専門とされる藤井英二郎氏をゲストに、都市における街路樹の役割と、国内外の樹木保全をめぐる状況をテーマに研究会を開催した。研究会前には、ボランティア・市民活動論 1A の履修者と研究会メンバーが合同で、神田警察通りの街路樹を守る会への訪問と聞き取り調査、および再開発による樹木伐採問題が起こる神宮外苑の樹木伐採問題のフィールドワークを実施するとともに、研究会内では白金校舎正門前の大銀杏の現地調査とともに、キャンパス内の樹木の管理状況についてのフィールドワークを行った。藤井氏よりは、欧米において都市の樹木の価値の再評価がなされ、それを可視化するためのシステムが導入されていることの報告や、樹木伐採をする際の最新の調査方法についての講義をいただくとともに、明治学院内の樹木が過剰剪定されていることについて、一本一本の木を確かめながら説明いただいた。この研究会により、昨年の行われた大銀杏の伐採や、今後検討される可能性のある伐根（伐採された後もヒコバエが生えている）の是非のみならず、明治学院が樹木と共生できているのかについて議論を深めることができ、横浜校舎も含めたキャンパスの樹木被覆率の向上等の問題意識を高めることができた。

2024 年 8 月 19 日～24 日高知県四万十町でのフィールドワーク

現地で森林保全活動に取り組む NPO 法人朝霧森林倶楽部の活動の参与観察を行うとともに、前年行った聞き取り調査のインフォーマントの作業小屋の見学をするとともに、森林管理の方法についての聞き取りを行った。こちらについて、調査についての勝俣氏の報告書は中間報告に添付したものを参照いただきたい。

2025 年 2 月 27 日 研究会「正門前大銀杏から考える：都市の緑、風致、そしてデモクラシー」

勝俣研究員による大銀杏伐採問題について経過報告ののち、藤井英二郎氏に加え、筑波大学名誉教授で造園学を専門とする鈴木雅和氏に「大銀杏伐採問題について考える視点」についてそれぞれ発表いただいた。藤井氏は日光太郎杉問題を糸口に、樹木の伐採をめぐる行政の裁量権が得られる公共利益と失われる公共利益を踏まえて判断されるべき点、そして失われる公共利益のなかに、その土地の歴史の生き証人／シンボルであることや、緑陰、景観といった部分を含めるべき点を指摘した。あわせて、正門前の銀杏が倒木危険性についての、特に空洞率 50%という評価についての検討がなされた。一方鈴木氏は、伐採の是非には直接ふれず、切り株から生えているのがヒコバエ（大銀杏のクローン）ではなく、胴吹き（大銀杏の同一個体）であるという重要な事実を指摘したうえで、大銀杏を港区、明治学院が連携して移植する展望を示した。これまでの首都圏の都市開発のなかで大樹を移植し、保存してきた経験や、被爆樹木保護の経験を踏まえて、関東大震災も経験し、明治学院の歴史を 150 年以上にわたって見守ってきた大銀杏が、これからの 150 年も見守っていくためのプロジェクトの可能性が示唆された。以上のお二人の発表を踏まえて、戸谷、野口両所員を交え、井深梶之助が町の風致を残そうとした信念やほこりの重要性や、大銀杏に関わる多様な人びとが大銀杏とともにある未来を語り合うものとしてのデモクラシーの可能性について議論を深めた。（文責 猪瀬）

2025 年 3 月 24 日 東北社会学会「『〈東北〉—構造的暴力の交差性と淵源—』への参加と、仙台の街路樹をめぐるフィールドワーク

2025 年 3 月 24 日、25 日の両日に仙台市に出張に出かけ、同市の東北大学川内キャンパスで行われた東北社会学会の例会に、勝俣誠氏と共に参加した。同例会では、宮城教育大学の山内明美氏による「〈東北〉——構造的暴力の交差性と淵源」と題された報告がなされ、その報告に対するコメンテーターをプロジェクト責任者でもある猪瀬浩平氏が務めたこともあつての同例会への参加であった¹。

山内氏の報告では、東北という呼称それ自体やその歴史に潜む、「国家」・「天皇」・「中央」に対する周縁としての東北地方に向けられた、構造的な差別や抑圧の実態・背景が、主に東北の視点から紹介された。

同報告では主題としては語られなかったが、氏によれば、「稲作地帯」や「米どころ」と

¹ 【第 2 回 複合差別の地域社会論】

日 時：2025 年 3 月 24 日（月）13:30～16:00

場 所：東北大学川内南キャンパス 文学研究科棟 2 階 大会議室

報 告：「〈東北〉—構造的暴力の交差性と淵源—」 山内明美会員（宮城教育大学）

コメンテーター：猪瀬浩平（非会員／明治学院大学）

して語られることの多い東北地方であるが、その「米」や「稲」さえも、実は先の「国家」「中央」対「周縁」「辺境」の図式を強化する中心的な要素になり得るということであった。植物や作物が、人間の生活や歴史に対して大きな影響を与えうる存在であるとの共通理解から出発している、我々のプロジェクトの認識とも共鳴する氏の指摘であった。

25日には、勝俣氏と「杜の都」として名高い仙台の市街地を散策・観察した。前日に報告会が行われた東北大学のキャンパスも緑多い一面に位置しているが、街を貫く定禅寺通や青葉通のケヤキ並木はつとに有名である。しかし、これらの素晴らしい街路樹も、かつては顧みられる機会も少なく、存亡の危機にさえあったことは、白金キャンパス正門前にあった「井深の大銀杏」にまつわる勉強会などを通して、知っていた。人が樹木を守り、樹木が人を守ってくれる——この基本的な関係の重要性について、改めて再認識することができた。

仙台駅の東口側にある榴岡（つつじがおか）公園も訪れた。同公園内にある仙台市歴史民俗資料館を見学するためであった。資料館の建物自体が、旧歩兵第四連隊の兵舎であるという歴史的な意味づけだけでなく、それを取り囲む木々の多さと年輪の深さが、「杜の都」の名の確かさをよりいっそう実感させてくれた。と同時に、上記の「人が樹木を守り、樹木が人を守ってくれる」の大原則が、ここでもしっかりと息づいていることを確かめることができた。（文責 戸谷）